

前例のないほどに冷え込んだ日韓関係。今や横のものを縦にしても非難の応酬になってしまう。歴史問題、慰安婦問題の難問に加え、竹島の問題は更に難しい。なぜなら前二者は過去の問題であるのに対し、竹島のそれは現在進行中の問題である上に、実効支配している韓国軍が撤収するまで終わらないからだ。昨年8月、すでに数十年にわたって占領されている竹島に、李明博氏が現職の大統領としては初めて竹島に上陸するという“大技”を演じたが、同島を巡る韓国政府のプロパガンダは大技だけにとどまらない。

米紙ワシントン・ポストのチコ・ハーラン東アジア総局長によれば、韓国は全省挙げて、英語に堪能な官僚を使って積極的に外国人記者との接触を図ってくるという。更に同氏は「韓国政府は見逃せないネタをくれる」とも言う。「ヘリをチャーターして独島（竹島の韓国名）に行きますが、同行しますか？」と、韓国外務省は外国人記者を言葉たくみに誘い、竹島に上陸させたというから驚く。それだけではない。実は韓国は大統領さえじきじきに外国人記者とオフレコ懇談に応じるというから、何とも頼もしい“一国の主”である。

翻って日本政府はどうか？ ボイス・オブ・アメリカの在日歴18年のベテラン、スティーブ・ハーマン北東アジア支局長は、「日本ではわずか数分の取材でも懇願しないといけな。韓国での人脈の90%は先方からのアプローチなのに」とこぼす。日本政府からは毎週のように島に関する政府見解を説明した文書のメールが届くそう。要するに何もしていないのだ。プロパガンダと言えは聞こえは悪いが「宣伝」のことを指す。だとすればもう少し努力が必要なのではないか。聖書の中で神が、今や滅亡寸前のイスラエルに向かって

「耕地を開拓せよ。いばらの中に種をまくな。」エレミヤ書4章3節

と叱咤しているところがある。厳しい情勢において、つい不精して適当に種をまいてしまったりすることを戒め、まず手間ひまかけて土を耕し、農地に適した良い地を造れという意味だ。実はこれをキッチリ実践した人物がいる。ずばりキリストだ。神でありながらわざわざ自ら出向いて人を癒したり助けたりした。山の上で座禅を組んだりするより、ゴスペルの宣伝の為に地道に働き我々の模範となっただけでなく、今も聖霊を通して働かれている。

